曲　目　解　説

明治祭 奉納舞楽

胡　飲　酒（こんじゅ）＝左舞

一名を酔胡楽とも宴飲楽ともいい、奈良時代に林邑（現在のベトナム地方）の僧仏哲が日本に伝えた林邑八楽のひとつである。

胡国の人が酒を飲み酔った姿を舞にしたといわれ、酒杓をかたどった桴を持って舞ったとも、胡国の王が笏を持って舞ったとも言われている。

今日では楽太鼓の桴に似た漆塗りのものを持って、長い髪と大きな鼻が特徴の重厚な面をつけ、白地に牡丹唐草の刺繍をあしらった褊襠装束を着し、烏皮沓という革製の黒漆沓を履いて舞う。

拍　子　神　社

旧南都楽所の辻家の邸内社として祀られ、祭神は拍子神（狛　近真…『教訓抄』の著者）と伝えられている。

例祭は11月３日、芸能の神と崇敬され芸能関係者の参拝も多い。

奈良市登大路町 県庁東交差点北東隅に鎮座する。

管　絃　の　部

壱越調音取（いちこつちょうねとり）

雅楽には６つの調子があり、壱越調は洋楽のＤ音に近い壱越調音を基音とする呂施法の調子をいう。音取とは元来演奏する各楽器の音調を整え和すことを目的として演奏したものが、次第に演奏する管絃の曲を示し、その雰囲気をも兼ねてもたらす意味で前奏する短い曲をいう。

春鶯囀入破（しゅんのうでんじゅは）

春鶯囀は天長宝寿楽、和風長寿楽、天長最寿楽ともいい、梅苑春鶯囀、天寿楽などの別名もある。唐楽の四大曲の一つで舞がある。

唐の第３代皇帝高宗は音楽に通じ、鶯の鳴き声を聞き楽工の白明達にその声をもとにして、この曲を作曲させた。興福寺の円憲得業は僧ながら雅楽に長じ、浄明院の自分の住んでいる房で、春の朝にまがきの竹に向かってこの曲を演奏していると、鶯が飛んで来て笛と同じ音でさえずったと『教訓抄』にある。

遊声（序吹）、序（序吹）、颯踏、入破、鳥声（序吹）、急声よりなり、管絃では颯踏、入破と続けて奏されることが多いが、本日はめずらしい６拍子の入破のみを演奏する。

舞　楽　の　部

振　　鉾（えんぶ）

舞楽のはじめに必ず奏する曲で、国土安穏、雅音成就を祈って舞台を浮めるために舞われる。

鉾を持つ赤袍の左方舞人と、緑袍の右方舞人が笛の乱声にあわせて鉾を振って舞う。

五　常　楽（ごしょうらく）＝左舞

人のふみ行うべき道である仁義礼智信を宮商角徴羽の五声にあてはめて作ったので、礼儀楽の名もある。唐の第２代皇帝太宗の作という、序・破・急の三つが完全に残っている数少ない曲のうちの１つである。今回は、序・破・急の全曲を演奏する。

舞人４人が蛮絵装束に巻纓冠をかぶる。舞人は急の曲のままで舞いながら舞台を降りるが、これを入綾の手といい左方の舞としては珍しいものである。

狛　　桙（こまぼこ）＝右舞

朝鮮半島との交易の船が、五色に彩色された棹であやつられ港に入るさまを舞にしたという。

近衛の官人の乗馬装束を着けて舞う。

４人の舞人が一列になり、棹をさして漕ぐ舞の振りがある。

胡　飲　酒（こんじゅ）＝左舞

午前の明治祭に林檎の庭で奉納されたものと同じ曲である。序と破からなり舞台を縦横無尽に動くすこぶる快活な曲で、他の舞にはない右手から左手、左手から右手へと撥を持ち替える所作がある。

長　慶　子（ちょうげいし）

舞楽の会が終わって、参会者が退出するときに演奏する曲で舞はない。

平安時代の楽聖、源博雅の作曲にかかるもので、曲調のよく整った、リズムの軽快な曲である。